

# 現在・過去・未来

——ハイネ・ハイネの『さまざまな歴史観』について——

高 池 久 隆

岡山理科大学理学部

(1994年9月30日 受理)

## I

ハイネ (Heinrich Heine) が「歴史」に対して並々ならぬ関心を抱いていたことは、彼の作品のそこかしこにある歴史への言及を見れば明らかである。「民衆の奇妙な気まぐれだ。彼らは、自らの歴史が歴史家の手によってではなく、詩人の手で書かれることを求める。彼らが求めるのは、あらわな事実の忠実な報告などではなく、かの事実がその生まれ来た源であるポエジーの中へと再び溶け入ることなのである。」(VII, 28)『ミュンヘンからジェノヴァへの旅』(*Reise von München nach Genua*, 1830) 中の上記の言葉は、最も印象深いものの一つであるが、ここには詩人と歴史の関係をめぐってのハイネの見解が明確に示されていると言えるだろう。

とはいえ、さらに一步踏み込んで、ハイネの把える歴史の中身、換言すれば、その「歴史観」を問おうとする試みは、少なからぬ困難に逢着せざるをえない。何よりもまず、時代ごとの変化に注目せねばならない上に、同時期の発言同士、あるいは、それどころか同一作品内の発言同士が互いに矛盾するという事態もハイネにおいてはさほど珍しくないからである。その中であって、今日『さまざまな歴史観』(*Verschiedenartige Geschichtsauffassung*, 以下『歴史観』と略記)の題で知られている文章は、短いものではあるが、歴史というテーマを正面から見据えており、かつまた論点が明確であることからして、歴史に対するハイネの姿勢を解明する上で欠かすことのできないものと言えよう。

本稿の目的は、『歴史観』の考察を通じて、ハイネの歴史観の諸相に光を投げかけることにある。

ところで、『歴史観』はハイネの生前に公表されたことがない。ハイネの没後に Adolf Strodttmann が遺稿の中から見つけたし、現在通用しているタイトルを付して1869年に発表したのである。従って、この文章の成立事情や成立時期について断定的に述べることは困難であるが、デュッセルドルフ版その他を参考にしつつ、概略を示すことにしたい。『歴史観』は、1833年にシュトゥットガルトの書店から刊行される計画であった『ドイツ史』(*Die Deutsche Geschichte*) への序文のための草稿であろうと見なされている。同書は、

メボルト (Karl August Mebold) との共編の予定であり、編者としてハイネは序文を書くことになっていた。ところが、この計画は間もなく頓挫し、草稿は結局断篇のまま残されたのである。成立の時期については、上述の関連からみて、ほぼ1833年の8、9月頃と推定されている。

## II

『歴史観』の構成は非常に単純である。すなわち、さまざまな歴史解釈がある中で両極端と思える二つのものを提示・紹介した上で、この両見解に対するハイネ自身の立場を明らかにするというものである。

まず、第一の歴史解釈はつぎのようである。

一方の陣営はこの世のあらゆるものの中に空虚な循環だけしか見ない。民族の生であれ、個々人の生であれ、そこに彼らが見るのは、有機的自然一般におけると同様、生育し、開花し、しばみ、死んでいく様、すなわち春夏秋冬なのである。「日の下には新しいものはない」が彼らのモットーである。そして、このモットーすら新しいものではないのだ。二千年前すでに東洋の王がため息をつきながら口に出しているからである。(X, 301)

そして、このような見解の信奉者としてハイネが挙げるのは、「歴史学派の哲人たち」(X, 301) および「ヴォルフガング・ゲーテの芸術時代の詩人たち」(X, 301) である。

歴史学派 (Historische Schule) とは「啓蒙主義的合理主義へのロマン主義的反動として18世紀以降、なかんずく19世紀ドイツにおいて発展した歴史的思考全般をさす<sup>2)</sup>」歴史主義 (Historismus) 的思想に基づく学派である。法学の分野においてザヴィニ (Friedrich Karl von Savigny) およびアイヒホルン (Karl Friedrich Eichhorn) がその中心人物と見なされている。しかし、『歴史観』で主にハイネの念頭にあったのが、もう少し若い世代として (1795年生まれ) 歴史の分野において活躍していたランケ (Leopold von Ranke) であることは、直接、間接の言及によって明らかである。

ハイネとランケの直接の出会いは極めて少ない。確認されているのは、1828年イタリアを旅している途中での出会いである。二人は、ともにベルリンでファルンハーゲン・フォン・エンゼ (Karl August Varnhagen von Ense) のサロンに出入りしていたが、その時期が重なり合わないため、サロンで直接顔を合わせることはなく、ファルンハーゲン・フォン・エンゼを通じて間接的にお互いを知るのみであった<sup>3)</sup>。上記の第一の見解に関連して『歴史観』の中では次のように述べられている。

北ドイツの、十二分に有名な或る政府は、この見解の有り難さが特別よくわかっていて、それを頼みに公費で人々をイタリアへ旅行させる。彼らに、イタリ

アの哀調漂う廢墟のもとで、心を穏やかに慰撫してくれる、かの宿命思想を自らのうちに育ませ、後日、キリスト教的屈従を仲介する説教師たちと組んで、自分達の機関誌を冷静に指し示すことで、民衆の三日間の自由熱を鎮静化させようとするのである。自由な精神力によって上へ伸びることのできない者は、蔓のように地を這っているがよい。しかし、未来はかの政府に教えることだろう、蔓と奸計でどの程度やっていけるものかを。(X, 301)

この引用については、いくらかの注釈が必要である。「政府」とはプロイセンのことであり、「民衆の三日間の自由熱」とは七月革命を指している。そして、この引用文は、直接名ざしているわけではないが、明らかにランケを念頭に置いている。日本語訳ではハイネの言葉遊びが伝わらないが、ドイツ語原文では〈am Boden ranken〉〈mit Ranken und Ränken〉(下線は引用者)という表現が使われており、各単語はおもての意味とは別にランケをも想起させ、揶揄することになるのである。

そもそもハイネが初めて公にランケのことを語るのは、『フランスの状態』(*Französische Zustände*)序文(1832年10月18日付)においてである。「プロイセン政府に費用を出してもらって暫く旅行した、哀れなランケ」(XII, 70)という形で、明瞭に名ざしされている。ランケは、1827年から31年にかけて、ウィーンを経てヴェネチア、ローマ、フィレンツェへの研修旅行を行なっているのである。ランケに対する直接の名ざしは序文においてのみであるが、本文中にもランケを念頭に置いていると思われる箇所が多い。例えば『記事六』(Artikel VI)では、「私は、できるだけ不偏不党で現代についての理解を促したい」(XII, 129)、あるいは「どの党派も、そのつもりなしに、われわれを欺く」(XII, 129)と一応言っておいて、しかし、そのすぐあとでは、

自分は独自の意見を持たず、時代の利害に関心を示すこともなく、ただただ、  
 いったい何がおこなわれているのかを聞きとりたくて、そのためあらゆるサロンのおしゃべりに聞き耳を立て、各党派の醜聞を別の党派のもとで探り出す、  
 そのような種類の無関心主義者たち [.....] (XII, 129)

という表現を使うが、これは明らかに、「不偏不党の」(parteilos)歴史記述を求めるランケ(を中心とする歴史家)の姿勢に対する揶揄・批判である。『フランスの状態』、『歴史観』が書かれる少し前、31年にイタリアからベルリンへ帰還したランケは、革命に共鳴する声と、それに対抗する勢力の対立の渦の中に投げ込まれる。そんな中で、封建的保守主義の雑誌『ベルリン政治週報』(*Berliner Politisches Wochenblatt*, 1831年秋創刊)とは距離を置き、「プロイセン国家とドイツ自由主義運動の国民主義的側面とを何らかの意味で結びつけようとする動き<sup>4)</sup>」があり、その発露として「歴史・政治雑誌」(*Historisch-Politische Zeitschrift*)が32年3月に発刊されることとなったのであるが、その編集を引き受けたのが

ランケであった。両極端が激しく相争っているときに、いずれにも偏しないことを標榜するこの雑誌は、意図とは裏腹に、一方の目には反動と映じ、また他方の目には反政府派におもねるものと映る。

さて、第一の歴史解釈を支持するとされる、もう一方のグループは「ヴォルフガング・ゲーテの芸術時代の詩人たち」であるが、これによく似た表現が『歴史観』と同じ頃執筆の『ロマン派』(*Die Romantische Schule*)にも見られる。すなわち、「ゲーテが帝位に在る間に現れた新しい詩人たち」(VIII, 150)である。これは、ブレンターノ(Clemens Brentano)、フケー(Friedrich de la Motte Fouqué)、ティーク(Ludwig Tieck)らをはじめとする、いわゆるロマン派詩人たちを指しているものと思われる。『歴史観』によれば、これらの詩人の特徴は「祖国のあらゆる政治的問題に対する人々の感傷的無関心主義を、この見解によってじつに巧みに言いつくろう」(X, 301) ことにある。「無関心主義」が問題になっているとすれば、ここでのハイネの関心は誰よりもゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)に向けられていると言って良いだろう。というのも、ハイネはゲーテの無関心主義について『ロマン派』で詳しく述べているからである。この中でハイネは、ゲーテの無関心主義の原因を以下のように、ゲーテの誤った汎神論理解に求める。

否、神は、ヴォルフガング・ゲーテが思っていたように、全ての物の中に一様に現れるわけではない。こう考えたためにゲーテは無関心主義者となり、人類最高の利害に取りくみもせず、芸術というおもちゃ、解剖学、色彩論、植物学、雲の観察に没頭したのである。神の現れには物によって多い少ないの差があるのであり、神はこの絶えざる現れにおいて生きている。神は運動のうちに、行為のうちに、時間のうちにあり、その聖なる息吹は歴史の一ページ一ページの中を吹きぬける[.....]。(VIII, 154)

### III

他方、第二の見解は以下のようなものとされる。

[.....] この世のすべてのものは、美しい完成を目指して成熟しており、偉大な英雄と英雄時代は、人類がより高い、神のごとき状態へ進んでゆく段階にすぎず、人類の数々の道徳的、政治的闘いは最後には最も神聖な平和、最も純粹な兄弟的団結、そして最も永続的な至福をもたらすというのである。(X, 301)

このような見解の主たる信奉者としてハイネが挙げるのは、「ヒューマニズム学派」(*Humanitätsschule*)と「哲学派」(*philosophische Schule*)である。

「ヒューマニズム学派」という言葉でハイネが誰を念頭においているのかを知るためのヒントは、これまた『ロマン派』の中に見いだされる。そこでハイネは、ドイツの偏狭な愛国心に対立するものとしてヒューマニズムあるいはコスモポリタニズムを示し、これら

を奉じてきたドイツの偉大な思想家としてレッシング (Gotthold Ephraim Lessing), ヘルダー (Johann Gottfried Herder), シラー (Friedrich von Schiller), ゲーテ, ジャン・パウル (Jean Paul) の名を挙げているのである<sup>5)</sup>。

他方の「哲学派」であるが、「歴史」と「哲学」の結びつきといえば、当然のことながら「歴史哲学」(Geschichtsphilosophie)が想起される。この語自体はもともとヴォルテール (Voltaire)によって造られたとされるが、「歴史哲学」はその後ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) によって哲学の一部門として確立されるに至ったのである<sup>6)</sup>。その際のヘーゲルの働きについては「理性の歴史性と歴史の合理性を等しく際立たせることにより、歴史記述者と哲学者の間の溝を克服するのがヘーゲルである<sup>7)</sup>」と評されている。ヘーゲルは、1822年から31年にかけて計5回ベルリン大学で「世界史の哲学」(Philosophie der Weltgeschichte)を行なっているが、同講義の内容は、ヘーゲルの没後、弟子および息子の編集により『歴史哲学講義』(Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte)として出版されている。その序論でヘーゲルは、まず歴史の見方を、「自分たちの目の前にあり、自分たち自身がそのおなじ精神を共にしている行為や事件や状況を記述<sup>8)</sup>」する「ありのままの歴史」(die ursprüngliche Geschichte), 時間あるいは叙述の精神において現在をぬけ出している「反省をくわえた歴史」(die reflektierende Geschichte), そしてヘーゲル自らが主張する、「理性が世界を支配し、それゆえ世界史もまた理性的に進行した、という単純な理性の思想<sup>9)</sup>」をたずさえ歴史におもむく「哲学的な歴史」(die philosophische Geschichte)の3つに大別している。さらに、「理性」と「神の摂理」の類縁性を指摘したうえで、次のように明言する。

わたしたちの認識は、永遠の知恵の目指すものが、自然という土台の上と同じく、世界において実在し、活動している精神という土台の上でも実現されたという、洞察を目ざすのである。その限りで、わたしたちの考察は、弁神論すなわち神の存在の正当化である。

また、「国家は、自由すなわち絶対の究極目的を実現したものであり、それは自己自身のため存在している<sup>11)</sup>」、さらに、「人間のもつ全ての価値と精神の現実性は国家を通してのみ与えられる<sup>11)</sup>」という形で、「理性」と「国家」の関係を最重要視する。ヘーゲルのこれらの発言を、『歴史観』において第二の見解を紹介する際のハイネの言葉、「神の摂理という理念により近い」(X, 301)や「完全に理性に基づいていて、人類を最終的に高尚にし、幸せにするという理想的国家形式」(X, 302)などと並べて観てみれば、ハイネが第二の見解として示しているものが、ヘーゲルを踏まえたものであることは明らかである。

『歴史観』執筆時に未だ印刷物として公表されていない、ヘーゲルのこのような思想をハイネが知っていたのは、ハイネがヘーゲルの口から直接聞いていたからであると推定される。1822年から23年にかけての冬学期にハイネがベルリンでヘーゲルの講義「世界史の

哲学」を受講していたことは確認されている<sup>12)</sup>。ハイネの思想形成におけるヘーゲルの影響は計り知れない。『歴史観』執筆頃のハイネは、ヘーゲルの弁神論、国家観に対して相当の距離を感じつつも、一方でやはり、ヘーゲル哲学のもつ論理の力をも充分評価している。師ヘーゲルの痕跡は、第二の見解のみならず、第一の見解の中にも見られる。すなわち、最初に引用した第一の見解において、歴史の中のすべてのものの空虚な循環という主張が有機物の循環と関連づけられているが、「自然における変化<sup>13)</sup>」と「精神的土台の上で起こる変化<sup>13)</sup>」を明確に区別しなければならない、と説いたのはヘーゲルであった。ハイネの思想的発展をヘーゲルとの関連において見るならば「直接の同一化（弟子―師匠）から離反へ<sup>14)</sup>」と表現されうるであろう。

#### IV

以上の様に、第一の見解はランケおよびゲーテの、第二の見解はヘーゲルの思想を色濃く反映しているものであるが、もとより、各人の思想がここで示されているごとくに一面的なわけではない。ハイネの意図は、各思想の客観的な提示にあるのではなく、相違を際立たせ、極端化された形での提示を行ない、対立の図式を形成することにある。とはいえハイネは、この両見解に対して中立的姿勢で臨むわけではない。第一の見解については、「自由な精神力によって上へ伸びることができない者は蔓のように地を這っているがよかろう」(X, 301)と一蹴しているのに対して、第二の見解については、「もっと明るい見解」(X, 301)、あるいは「上を目指す彼らの努力は低いところを這う蔓の小さな曲がりくねりよりも、いずれにせよ好ましい」(X, 302)といった表現がとられていることから見て、ハイネが第二の見解に対してより大きな共感を示していることは明らかである。

しかし、ここでハイネは、「生活感情」(Lebensgefühl)を拠り所として両見解に「否」を突きつける。生が空虚な循環の一コマにすぎないと考えることにも、また、生が別の目的のための手段にすぎないと考えることにも抵抗があるというわけである。「生は目的でも手段でもない。生は権利である。生は硬直していく死、つまり過去に対して、この権利を主張しようとする。そして、この権利の主張が革命である。」(X, 302)これが、第一、第二の見解を否定し去った後のいわば第三の道としてハイネにより提示されるものである。

#### V

以上、『歴史観』の構成にそって、ハイネの主張の概要を確認してきたが、この文章自体は、鮮やかに論点を整理した明晰なものであり、これだけを読む限りハイネの立場は明瞭である。しかし、ここでハイネの歴史観を『歴史観』の枠を越えて、ハイネの全体像から、さらには、時代の動向から捉え直すことが必要であろう。そもそもハイネにとって、第一、第二の見解は、自らの外部に、自分とは無縁なものとしてあるのではない。

例えば、『歴史観』と比較的近い時期に書かれたと想像される<sup>15)</sup>、いわゆる『ヘルゴラン

ト便り』, すなわち『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』(Ludwig Börne. Eine Denkschrift)の第二巻には, 第一, 第二の見解のヴァリエーションが明確に読み取れる。

[.....] 私が万人の幸福のためわが身を苦しめてきたにもかかわらず, それによって幸福が推進されることはほとんどなかった。世界は, 動かず静止しているというわけではないが, 極めてむなしい循環をつづけているのである。(XI, 47)

一方で, このような運命論に支配された言葉を語るハイネが, その少しあとのページでは, 一転して以下のような宣言を行なうのである。

休息へのわが憧れは消え去った。今また私には, 自分が何をしたいのか, 何をなすべきなのか, 何をせねばならないのかがわかった。……私は革命の息子だ。  
[.....] 私は全身喜びと歌, 全身剣と炎。(XI, 50)

この例の場合には, 七月革命の知らせを受ける前と後のコントラストを意図的に強調している側面もあるが, 両発言に似たことは, 他のさまざまな箇所でもハイネの口から発せられている。そして, ハイネ自身, 自らの心が相反する二つの見解の間を振幅大きく動くことを充分自覚していた。信頼するファルンハーゲン・フォン・エンゼに宛てた, 1831年の手紙の中でハイネは「事物は, 個々人の関与がなくとも, ひとりでに進んで行くのでしょうか。これが大きな問いであり, 私は今日肯定したかと思えば, 明日にはまた否定するという有り様です<sup>16)</sup>」とその心中を吐露している。

ハイネの歴史観のこのような揺れは, 単に支離滅裂な内部分裂と見なされるべきではない。「自己保存<sup>17)</sup>」(Selbstbewahrung)と「自己犠牲<sup>17)</sup>」(Selbstaufopferung)という二つの要素の激しい葛藤がハイネ自身の内でくりひろげられていることを理解すべきであろう。そして, Fingerhut の指摘する通り, この揺れの原因として, 伝記的事実や生活感情以外に, 「文脈, 著者の意図およびパースペクティブ, 選ばれたジャンル, 形成原理<sup>18)</sup>」が大きな重要性をもっているのである。そのことは, 『歴史観』にも当てはまる。すなわち, 上でも見たとおり, ハイネの立場が決して中立的ではなく, 第二の見解の方により大きく傾斜しているとすれば, その大きな要因として, ランケの存在が挙げられねばならない。歴史家として大きな影響力を発揮し始めているランケは, 「党派」から自由であることを唱えつつ, 結局はプロイセンの体制維持に大きな役割を果たしているがゆえに, ハイネにとって放置できない存在となっていた。いくつもの当てこすりからも, 『歴史観』に込められているハイネの意図は充分想像できることなのである。

さて, 最後に私たちは, 『歴史観』におけるハイネの主張を, 歴史を扱うにふさわしく時間を軸に見てみることにしたい。ハイネは一方で, 現在とは切り離された過去を拒絶するが, 他方, 過去は現在の, 現在は未来のための一段階にすぎないという見方にも反対する。

「過去」および「未来」によって侵食され、おとしめられた「現在」の復権、これこそがハイネの強く主張するところなのである。そしてまた、この基本的立場をハイネは、同時代人たち、とりわけ「若いドイツ」(Junges Deutschland)の作家達と共有しているのである<sup>19)</sup>。

### テキスト

ハイネの著作の底本としては下記のものを用い、引用の際は本文中にその巻数とページ数を(V, 100)のように付記した。また註においては下記全集をDHAと表記する。

Heinrich Heine: *Sämtliche Werke*. Düsseldorf Ausgabe. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973 ff.

### 註

- 1) Vgl. DHA X, S. 795ff.; Gerhard Höhn: *Heine-Handbuch. Zeit, Person, Werk*. Stuttgart 1987, S. 265f.
- 2) 『新社会学辞典』有斐閣 1993年 1501ページ。
- 3) Vgl. Susanne Zantop: *Verschiedenartige Geschichtsschreibung: Heine und Ranke*. In: *Heine-Jahrbuch* 23. Hamburg 1984, S. 43.
- 4) 林健太郎『ランケの人と学問』(林健太郎責任編集『世界の名著 続11 ランケ』中央公論社 昭和49年) 18ページ。
- 5) Vgl. DHA VIII, S. 141.
- 6) 『新社会学辞典』(前掲書) 1503ページ参照。
- 7) Jean Pierre Lefebvre: *Der gute Trommler. Heines Beziehung zu Hegel*. Hamburg 1986, S. 76.
- 8) Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Werke*. Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel. Frankfurt am Main 1970. Bd. 12, S. 11.
- 9) Ebd., S. 20.
- 10) Ebd., S. 28.
- 11) Ebd., S. 56.
- 12) Vgl. Fritz Mende: *Heinrich Heine. Chronik seines Lebens und Werkes*. Zweite, bearbeitete und erweiterte Auflage. Stuttgart 1981, S. 31.
- 13) Hegel: a. a. O., S. 74.
- 14) Lefebvre: a. a. O., S. 82.
- 15) Vgl. DHA XI, S. 259ff.
- 16) Heinrich Heine: *Werke, Briefwechsel, Lebenszeugnisse*. Säkularausgabe. Hrsg. von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. Berlin und Paris 1970ff. Bd. 20, S. 434.
- 17) Wolfgang Kutteneuler: *Heinrich Heine. Theorie und Kritik der Literatur*. Stuttgart 1972, S. 57.
- 18) Karl-Heinz Fingerhut: *Standortbestimmungen. Vier Untersuchungen zu Heinrich Heine*. Heidenheim 1971, S. 91.
- 19) Vgl. Helmut Koopmann: *Heines Geschichtsauffassung*. In: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft XVI*. Stuttgart 1972, S. 455.



## Gegenwart-Vergangenheit-Zukunft

— Heinrich Heines *Verschiedenartige Geschichtsauffassung* —

Hisataka TAKAIKE

*Okayama University of Science,*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1994)

Der Versuch, Heines Geschichtsansicht klarzumachen, stößt immer auf Schwierigkeiten, weil seine Äußerungen zur Geschichte, die wir hier und dort in seinen Werken finden, oft so widersprüchlich sind. Eine große Bedeutung gewinnt in dieser Situation der kleine, aber zielbewußte Aufsatz Heines über ‚verschiedenartige Geschichtsauffassung‘, den Adolf Strodtmann aus dem Nachlaß des Dichters herausgegeben hat. Die vorliegende Arbeit versucht, den Aufsatz zu analysieren und dadurch einen Anhalt für das Verstehen der Geschichtsauffassung Heines zu finden.